

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：43502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03588

研究課題名(和文) 初期近代イングランドの経済の制度化をめぐる論争とオランダ・モデル

研究課題名(英文) The controversies over the institutionalization of early modern English economy and the Dutch model

研究代表者

伊藤 誠一郎 (Seiichiro, Ito)

大月短期大学・経済科・教授(移行)

研究者番号：20255582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：17世紀イングランドで、漁業、利子率、銀行、土地登記を巡る論争が広く展開されたが、これらの論争は、当時先進国であったオランダのモデルをいかに真似ることによって、またいかにイングランドに適したものに調整しながら取り入れることによって、イングランドの経済がさらに成長していけるかをめぐる論争であったということを明らかにし、この成果を英語での単著として出版するべく、原稿を完成させ、ブック・プロポーザルを作成し、イギリスの出版社に提出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日の世界の状況を考えたとき、アメリカの衰退と中国の台頭という大きな流れの中で、20世紀後半からの日本も、その世界における位置づけは時と共に変わってきた。われわれは、どこに向かい、何を目指すべきなのか、そうした極めて現代的な疑問へのヒントが、17世紀に、のちに世界のヘゲモニーを握るイングランドが、当時の先進国オランダをどう論じたかを見ることによって得られる。

研究成果の概要(英文)：There were widely-held controversies over fishery, interest rates, banking and land-registration in seventeenth-century England. I revealed that the issues of these controversies were about how to imitate the Dutch advanced model and how to adjust and adopt it for the English economic growth. I finished the draft of an English book, wrote a book proposal for the publication and submitted it to a English publisher.

研究分野：経済思想史

キーワード：経済思想 17世紀 イングランド オランダ

1. 研究開始当初の背景

これまで、世界で最初の近代的な商業銀行であるイングランド銀行が設立された時期(1694年)に至るまでの一世紀のあいだにイングランドで書かれた、さまざまな種類の銀行の設立案のパンフレット、手稿類を調査し、その著者たち、つまり銀行設立の企画者たちが、みずからの銀行設立案において何を「売り」にしていたかをみることによって、この時代に求められていた銀行の役割を描き出してきた。また、そのことを通じて「近代的」といわれる銀行業が元来どのような議論の上で設立されるようになったのか、を明らかにしてきた。‘The making of institutional credit in England, 1600-1688’(*European Journal of the History of Economic Thought*, vol.18:4, 2011)においては、慈善銀行や抵当銀行の設立案で強く打ち出されていたのは、いかに多くの貸し出しができるかではなく、その貸し出しに対していかに安定した基金 fund を作るようになっているかであったことを示した。そしてこの基金を構成すべきもののなかでもっとも信頼されていた土地財産を、より確かなものにするために公的な土地登記所を設定すべきか否かについての論争が繰り広げられた。これについては、‘Registration and credit in seventeenth-century England’(*Financial History Review*, vol. 20:2, 2013)において明らかにした。また同時期に、法定利率はトレードの促進の原因となるのか、それとも結果であるのかについての論争があるが、これまでの研究では自然利率の認識をめぐるものとして理解されてきたが、実際に当時の文献のなかで論じられていたのは、銀行設立や登記所の設立などと並ぶオランダ経済の繁栄の原因の一つが低利率であり、オランダのような経済的繁栄をもたらすにはイングランドほどの点を真似るべきかをめぐってであり、しばしば法定利率の引き下げを反対する論者は、むしろ登記所の設立によって銀行による貸し出しの担保をより信頼できるものにすべきだという主張をしていた。このことは、1668-70年に起きた論争と、その後の展開にわけて、‘Interest controversy in its context’ (2010)と‘Interest Controversy, the second round’(2012)として原稿にまとめ、それをもとにヨーロッパ経済思想史学会(以下 ESHET と略)において研究報告をした。このような、多様な社会・経済制度の視点からの17世紀イングランドの信用制度に関する論争の再検討は、名誉革命後のいわゆる土地銀行論争についてもおこない、複数の原稿にまとめ、ESHET やオーストラリア経済思想史学会(以下 HETSA と略)において報告してきた。しかし、こうした経済、とくに金融関連の一次資料を読みすすむにつれて、多くの論者が漁業、とくにニシン漁の重要性を指摘していることに気づき、大英図書館やロンドン大学図書館の貴重書や手稿類を調査していくと、このテーマに関する多くの文献があることに気づいた。そして、これらを読み進めるうちに、銀行、登記、利子についての文献においてそうであったように、またそれ以上に、漁業についてはオランダから多くを学ぶべきことが当時のほとんどの論者によって強く主張されていることを確認した。オランダの繁栄の重要な原因が漁業、とくにニシン漁の成功であるとイングランドでは認識されており、世紀も半ばになると、たんにニシン漁だけでなく、オランダ社会全体を、さまざまな優位点をもつモデルとして描かれていることが明らかになってきた。これをまとめ、「一七世紀イングランドのトレード論争 オランダへの嫉妬、憧れ、警戒」(田中編『野蛮と啓蒙』2014年所収)として刊行した。しかし、この原稿の作成の過程でも、さらに多量の関連一次文献がみつき、これらをオランダ漁業論とオランダ経済脅威論という視点から分析し、それぞれ‘What should the English learn from the Dutch?’と‘A neighbour country, Holland: an ideal model to follow, or just an enemy?’としてまとめ、2014年と2015年の ESHET で研究報告をおこなった。当初銀行設立案関連の論考(名誉革命後の土地銀行論争も含む)をもとに英語での単行本として出版することを目標とし、2012年のロンドンでの

ESHET の際、ある英国の出版社にも相談し、その後メールで連絡もとったが、ここ数年 17 世紀の漁業関連の論争に関する研究を進めるうちに、むしろ 17 世紀イングランドの経済思想文献におけるオランダ・モデルとイングランド経済の制度化へ向けた議論という視点でまとめたほうがいいのではと思いなおすにいった。

## 2 . 研究の目的

(1)上記のような経緯を踏まえ、17 世紀のイングランドにおいて、経済に関する諸制度改革案を提示した論者たちにとって、オランダが漁業のみならず社会全般として見習うべき手本であり、世紀半ばごろには共通した理想社会 = オランダ像ができてきたことを示し、とくにそのなかで銀行設立、登記所設立、低利子率の実現が早急に取り組むべき制度的改革案として考えられ、その実現のあり方をめぐる論争がそれぞれについて繰り広げられたことを、上記の研究では扱いきれなかった一次・二次文献を通じてさらに調査・検討し、英語の単著としてまとめることを目指す。

(2)(1)にみるような、オランダ・モデルをその基礎に置く 17 世紀の経済論争のあとにくる、フランスとの敵対関係という新しい文脈への変遷を意識しながら、名誉革命後の土地銀行論争の研究を続ける。そこでは、対仏戦争をめぐるイングランド銀行と諸土地銀行企画の政治的対立という従来の研究での図式ではなく、ここでも基金の安定性、信頼性が最大の関心事であったことを明らかにする。

(3)これまでここで扱っている時代の社会・経済史、もしくは思想史は「重商主義」という言葉でくくられてきたが、最近は、そうした枠組みにとらわれない、より歴史的な、多様な視点からの、そして豊富な資料にもとづいた研究がとくに欧米で活発にすすめられているが、それでもなお、前近代的な、保護主義的な経済政策をさして「重商主義」ということばを用いることは多い。本研究では、後進国が先進国の経済を追いつき追い越そうとする過程で現れる思想的葛藤の連続を、経済思想史における「重商主義」として改めて定義づけ、これは、少なくともスペイン、オランダ、イングランドという実際の経済のヘゲモニーの変遷に対応した思想史上の展開として位置付けられると考え、これを英語圏以外も含む諸外国の研究者との連携で検証していくことを試みる。このテーマに関しては、ブラジルのこの分野の研究者である Alandre Cuhna 氏 (Universidade Federal de Minas Gerais) と、最終的には出版を目指す企画としてすすめることに合意しており、本研究期間はその初期準備段階とし、まずは企画の趣旨をまとめ、共同研究者 (執筆者) を探し、学会などでのセッション報告をすすめていく。

## 3 . 研究の方法

本研究は、日本語および英語での学会や学術専門雑誌等での公表を目的とする。そのための方法は以下の通りである。資料収集: 国内外の図書館の利用や購入により一次・二次文献の収集と、とくに英国の大英図書館、ロンドン大学図書館、米国のハーバード大学図書館などにおいて、現地でしか閲覧できない手稿類の調査。口頭発表: 原稿をまとめ、日本、欧州、豪州の経済思想史学会にて報告。刊行: これらの原稿を修正・改良し、英文学術専門誌への投稿や英文著作として刊行のための準備をすすめる。その際英語の場合、英語のネイティブ・チェックを依頼。学術雑誌への投稿や著作の刊行は、一回で採用されることは困難なので、レフェリーからのコメントを参考に原稿を修正・改良したのち、投稿や著作企画の応募を繰り返すことになる。

#### 4 . 研究成果

平成 28 年度には、これまでの研究の成果をもとに英語での著書を作成するという中心的な目標のもと、以下のことを行った。(1)平成 28 年 3 月に Political Economy 研究会(東京大学)で報告した book proposal を、そこでのコメント、議論等を参考に大幅に加筆・修正を行った。しかしその後、現在英語での著書の出版が決定している複数の同分野の研究者からの情報によると、出版の応募に際しては最初に全原稿ができていと交渉がうまくいくとのことであり、book proposal の改訂版を作成し終えた 6 月ころから、著書としての全原稿の作成に集中した。(2)著書の第一章にあたる部分の原稿をまとめる中で、17 世紀の論争の前提ともなった 16 世紀の第 4 四半期に繰り広げられた漁業や海事に関する議論についての調査を進め、大英図書館所蔵の手稿など新たな資料も参考に英文原稿としてまとめた。これを、'Navy or fishery: the beginning of the century-long controversy'というタイトルのもと、12 月に社会思想史研究会(同志社 大学)で報告した。(3)1 月以降は、17 世紀のイングランドの漁業とトレードに関するこれまでの原稿への加筆・修正を行った。(4)5 月にパリで開催された ESHET に参加し、そこで重商主義に関する共同研究計画についてブラジルの Alexandre Cunha 氏と打ち合わせをした。それまでに私が作成した計画案に、Cunha 氏が加筆・修正をすることとした。また前年に book proposal を見てもらったダブリン大学の Antoin Murphy 氏から、その後の作業の進め方について、アドバイスをいただいた。(5)8 月末から約 2 週間、2 月末から約 2 週間ロンドンに行き、大英図書館手稿室やロンドン大学図書館での資料収集・調査を行った。

平成 29 年度には、英文著作(この時点での仮題 : The making of the English economic discourse-four seventeenth-century controversies over the Dutch model-)の chapter, 1 Herring fishing and the Dutch model の一部となる 16 世紀後半のイングランドにおける漁業に関する議論をまとめた論考'Navy or fishery - the beginning of the early modern English economic controversy -'を平成 28 年度に用意していたが、それをさらに拡充し、ESHET(5 月、アントワープ)で報告した。そして、それを含め、英文著作の chapter 1、2、3、4 の推敲を順次すすめて、12 月末頃までに終えた。また、その間、9 月には必要な資料を収集しに大英図書館、ロンドン大学図書館などを訪問した。年末から改めて、book proposal を改訂した。そして 1 月中にまず、book proposal の英語校閲を専門業者に依頼し、その校閲稿を改めてチェックした後、国内外の研究者に個別に送って、コメントも何人かから得た。校閲料の科研費からの支払いについては、申請中の経済学史学会英文論集委員会からの補助が得られるかがわかる新年度まで待つこととした。他方、この著作の続きとなる研究の一部である、1690 年代中ごろの土地 銀行論争についての原稿作成のために必要な資料調査を 2 月末から 3 月初旬にかけてロンドンで行い、平成 30 年 6 月にマドリッドで開催される ESHET での報告のための原稿の準備に取り掛かり、'The land bank united, a failed project'としてまとめていった。

平成 30 年度には、平成 28 年 3 月に国内の研究会で報告した book proposal の改良を繰り返したもののファイルを、ESHET の前にダブリン大学の A. Murphy 教授に送り、大会で面会した際に詳細なコメントをいただいた。それを踏まえてさらに改良し、本科学研究費と経済学史学会からの補助金の利用によりこの book proposal と本文全体を、専門の業者によって英語校閲を済ませた。その後、平成 30 年夏に英国の出版社に book proposal を送ったが、年末に不採用の通知を受け、その後別の英国の出版社に送ったがこれも年度末に不採用の通知を受けた。平成 30

年の ESHET では、この著作の銀行の論争のその後の展開について論じた原稿を前年度にまとめていた‘The land bank united, a failed project’を報告した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Ito Seiichiro	4. 巻 58
2. 論文標題 Mercantilism reimagined or redefined?	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 The History of Economic Thought	6. 最初と最後の頁 139 ~ 148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.5362/jshet.58.1_139">https://doi.org/10.5362/jshet.58.1_139</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Seiichiro Ito
2. 発表標題 The Land Bank United, a failed project in 1696
3. 学会等名 The European Society for the History of Economic Thought（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Seiichiro Ito
2. 発表標題 Navy or fishery - the beginning of the early modern English economic controversy -
3. 学会等名 The 21th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤誠一郎
2. 発表標題 Navy of Fishery: The Beginning of the Century-long Controversy
3. 学会等名 社会思想史研究会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----